

R2 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	久留 智之	勤務最終年であったがコロナ禍に見舞われ、様々な催しがキャンセルされてしまった。しかし、リモートでの会議や授業など新たな学びも多かった。
作曲	教授	小林 聡	全ての項目について継続的に努力したと思う。本学の交際交流に関して、タンペレ応用科学大学との協力関係の推進とUSCDとのMOUの更新には、コンタクト・パーソンとして、積極的に関わった。他の大学・研究機関との連携についても、社会連携センター長として、積極的に関わった。また、コロナ禍にありながらも、関係者・関係機関と連絡を取りながら、ドイツから客員教授を本学に招聘した。本学と地域社会との連携についても、本学の特色を生かしながら、地域社会に貢献できる道を常に考えてきた。COVID 19のため、中止・延期となったプランやイベントが多いが、今後の活動を充実させてゆきたい。
作曲	教授	山本 裕之	今年度はCOVID-19の影響により、これまでの常識が様々な場面で通用せず、公演（生演奏）での作品発表が制限されることになった。一方でこれを機にいわゆる「オンライン化」が社会の中で必要とされるのに伴い以前にも増してその環境が整備され、授業や作品発表の形態について変革が求められた。社会活動のオンライン化がおそらくCOVID-19収束後もある程度維持されると見込まれるため、この機に積極的にオンラインでできることに対応するスキルを磨くことができた。一方で、オンラインに適さない事項（一部の授業や芸術活動など）も逆に明らかになった。オンラインが推進される社会の中で、非オンライン活動をどのように活かしていくのが今後より問われることになると感じている。
作曲	准教授	成本 理香	前期は、コロナの影響で「遠隔授業においてどこまで普段の授業に近い内容をキープできるのか」について試行錯誤し続けることとなり、なかなか作曲や研究の時間がとりにくくなった。そのような日々の中で50曲のピアノ小品を作曲したこと、中経連Next30産学フォーラムにおいて「アフター・コロナはどうなるのか？多様な学問分野から考える」というフォーラムに登壇したことなどにより、なんとか研究活動も行った。また、音楽学部のコロナ対策チームの一員となり、学内のコロナ感染予防には貢献できたと思う。後期には大学の感染対策方法も固まっていたこともあって、紀要への研究報告執筆、ソルフェージュにおける新たな教材の作成と開発等も行うことができた。総評としては、コロナに振り回されてしまった一年だったが、それでもなんとか時間を見つけ出し研究、創作活動はできたと言える。しかし、例年より量が少ないのは否めないため、コロナ禍において、どのように時間を捻出するのかというのが今後の課題であると言える。
音楽学	教授	井上 さつき	コロナ禍のため制約も多かったが、幸い、年度当初に計画したことは、かなりの部分実施できた。共著『万博学』が刊行され、それに関する国際シンポジウムに参加、発表できたことはうれしく思っている。教育活動としては、コロナ禍のため、遠隔授業を行わなければならない、その準備に追われた一年だった。
音楽学	教授	安原 雅之	コロナ禍対策に明け暮れた1年間だった。教育活動と大学運営の面で、一定の成果を上げることができたと思う。
音楽学	教授	東谷 護	学術面では資料復刻と解説、論考を収録した書籍を3月に刊行した。就任3年で学術著書を4冊刊行したことになる。一般向けには講談社の週刊漫画雑誌「モーニング」に掲載のジャズ漫画の監修を依頼されたこと、一般社団法人 中部経済連合会・中部圏イノベーション推進機構が主催する講演会に招聘された点においては、高く評価出来るだろう。来年度以降も健康に留意して、今年度以上に研究教育に力をそそぎたい。
声楽	教授	中巻 寛子	コロナ禍の中、特に感染リスクが高いとされる声楽専攻の主任として、神経を張り詰めて過ごした1年であった。それでも、何とか感染者を出さずに、対面レッスン、演奏会、実技試験、等々を無事終えられたこと、各種委員を大過なく務められたことで、教育、大学運営に関しては概ね良しとしたい。その一方で、演奏会の中止等、個人としての研究が思うに任せぬ仕儀となった。次年度は満を持してこちらにも力を注ぎたい。

R2 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	森川 栄子	困難な状況下において、まずはできることから、できる限りのことを行い、できることは行えたと考えている。そのなかでやはり犠牲となったのは研究面であろう。自己の発表の場のみならず、全ての音楽演奏発表の機会が極度に少なくなりそれを鑑賞することも難しい状況であった。例年おこなってきた海外研修も実施できなかった上、次年度の実施の可否も不透明であるため、今後の研究発表の計画についての見直しが必要となってきている。
声楽	教授	小原 啓楼	新任のスタートからリモート授業となり、戸惑うこともあったが、学生の高い資質と意欲に助けられた。学生の様々な個性に沿った指導を心掛け、意欲的な取り組みを引き出すことを心掛けた。また、新型コロナ禍の影響もあってか、想像していたよりも遥かに大学運営の負担が大きく、教育や研究が圧迫されてしまわないよう配分が非常に難しいと感じる。
声楽	准教授	川島 幸子	コロナ禍の中、世界中の人々がそうだったように、私にとっても大変な一年となった。コロナに対する個々の考え方や感覚の違いによって生じる問題をどのように向き合い対処すればよいのか、日々その繰り返しで非常に難しかった。このような状況下だからこそ、たとえ少数意見だとしても、それを話し合える、意見を述べる事が出来る環境と勇気が必要だと感じた1年だった。
声楽	准教授	初鹿野 剛	これまで自由に出来ていたものが途端に出来なくなった1年だった。学部内の新型コロナ対策チームメンバーを急遽指名され、メンバーとともに各種ルールの策定、授業・演習場所の感染対策、そのためのスモークテスト、専攻内の各教員の実技レッスン実施における換気方法の指導や注意喚起を、専攻主任や教務委員らと連携して実施した。本務であった入試委員やオペラプロジェクト会議においても新型コロナ対策を余儀なくされたが、関係する教員、公演予定ホール担当者らと協議を重ね、実施することが出来、ホッとしている。新年度以降も未だ暫くは終息しないと考え、引き続き、withコロナの中、学生や教職員の安全と「対面で授業を受ける喜び」を考えながら感染対策を講じていきたい。
声楽	准教授	森 寿美	着任初年度でコロナ禍の中、何をするにも困難な状況であったが、まずは、教育活動、大学運営、社会貢献に全力で取り組めたことが大きな成果であった。改善しなければならぬ点は、今年度の反省を踏まえながら来年度改善していきたい。研究活動においては、演奏活動が難しい状況であるが今だからできる研究論文に向けての計画、準備に取り組んでいきたい。
ピアノ	教授	熊谷 恵美子	自身の研究と教育、大学に関わる運営、社会貢献のどれも私にとっては大切なものであるが、どれも十分ではないのが現状である。特に教育面に関しては、研究との関わりを深めていきたいと考える。
ピアノ	教授	北住 淳	「コロナ禍中の芸術文化の役割」に手探りの模索が続いた年度であったと言える。大学の果たす社会的役割を、芸術や勢いを維持したままどうやって継続するか、探究が続くと思われるが、諸々の対策を講じての懸命な中にもゆったりした本学の対処が、自らの励みにもなっている部分大きい。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	コロナ対策および施設整備に関連した大学運営業務が多忙を極め、研究活動は続けたものの納得のゆく内容にはならなかった。今後は研究と大学運営のバランスを大幅に変更する必要がある。教育面では担当学生の中から修了不可となったものが1名あった。今後は学生の自主性を尊重しながらも、より厳しく学習計画を管理する必要がある。
ピアノ	教授	内本 久美	コロナ感染防止対策に沿い、より安全な教育活動を心掛けた。
ピアノ	准教授	鈴木 謙一郎	今年度、コロナ渦において、授業は遠隔であったり不自由なことが多く、また、学生、自分自身のコンサートもかなり中止におこまれたりしたが、その中で、指導法、演奏法をじっくり考える良いきっかけにはなった。

R2 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
ピアノ	准教授	中尾 純	ベートーヴェン生誕250周年記念リサイタルが中止となり、残念である。この一年は学生たちの熱心な取り組みが救いであった。次年度からのスクリービン・ピアノソナタ全曲演奏会を何とか成功させたい。
ピアノ	准教授	武内 俊之	着任2年目で、地に足をつけてのより集中した諸活動を目標にしていたところ、コロナ感染症への対策に心身ともに忙殺され非常に困難な年になってしまったが、そんな中でも出来る限りの努力と取り組みを行い、当初計画に沿った成果を出すことができたと考えている。
弦楽器	教授	福本 泰之	新型コロナウイルス感染予防対策関連の会議、対面授業開始のため対策、教員・学生への感染予防徹底に明け暮れた感がある。研究や社会貢献にあつては、コロナ禍であったからこそできたことがあつたのでは、という反省の気持ちもあるが、それどころではなかったかもしれない。通常に近い状態で授業等ができている現状を見ると、頑張った良かったと思う。
弦楽器	教授	花崎 薫	コロナ禍のため4月5月は在宅となり時間が増えたため新しい曲の研究、難曲に対しての取り組みなどを行った。コンサートの機会が激減し、学生たちも成果を発表する場が少なくなったと思われるが、オーケストラ定期演奏会の指揮者ユベール・スダーン氏が奇跡的に来日でき素晴らしいコンサートができたことは数少ない成果の一つだった。オーケストラ部長としてスダーン氏と大学の間を取り持つことができたことは、自身としてもとても嬉しいことであった。自己評価という点では今年度の評価に値すると思う。
弦楽器	教授	白石 玲子	今期は新型コロナウイルスの影響で演奏会のキャンセル或いは延期が多く、研究活動の部分では影響が大きかった。教育活動としては、5月まで遠隔レッスンであったが、普段以上に時間を掛けて丁寧に説明し、youtube等の動画も活用する事で、出来る限り対面でのレッスンと変わらない充実した内容となるよう心掛けた（6月からは対面授業・台湾からの留学生については10月上旬まで遠隔）。出場を予定していたコンクールへの参加を見合わせた学生が少なからずおり、教育成果として記述できる件数は限られるが、その様な中でも、優秀な成績での大学院進学やオーディション合格等、学生への指導効果は例年と大きくは変わっていないと感じている。社会貢献でも、コロナ禍ながら開催されたオーディション審査へは参加したものの、審査員を務める予定であったコンクールが不開催となる等、例年より活動は縮小となった。
弦楽器	教授	桐山 建志	新型コロナウイルス感染症対策で大変な一年だったが、対策チームの一員として、また入試委員長として感染症対策を講じた入試の実施など、責務をこなすことができた。
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	今年度はレッスン方法から、大学での生活に至るまで様々なことが変化を求められる本当に大変な一年でした。学生との対面レッスンも早い時期に再開でき、感染対策を十分にしながらレッスンを安全に実施できたことは、本当に良かったことと思います。試験も換気対策をとった部屋でおこなうなど、今までにない環境下で演奏することになり、違う意味でどんな環境でも弾けなければならないタフさも学ぶこととなりました。音楽文化は、こういった状況であっても絶やしてはいけけないし、情勢が好転していった時にも、大学一丸となって、大学として、また研究室としてできることを目一杯行っていきたいと思っています。
管打楽器	教授	倉田 寛	今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止策における対応に追われ、通常とは異なる授業形態が取らざるを得ない状況だったが、逆に音楽を生で伝える大切さを再認識できたと共に、メディアを通したミュージックエンタテインメントの必要性和多様性を模索することができた。その一つとして、学生達とリモートを通じて制作した室内楽作品などは、新たなビジネスを生み出す可能性があると感じた瞬間でもあった。大学運営においては、臨時に招集されたコロナ対策チーム委員会メンバーとして大学運営に尽力でき、学生が安心して対面授業を受けられる体制を整えられたことに安堵している。大学院特殊研究においては、オペラ作品などのレチタティーヴオやカデンツァを用い、表現や色彩感を出すために音葉の意味やシュチュエーションを理解することで、音色や音楽性に影響を及ぼすかを研究した。その成果をコンチェルト発表に生かすことができた。

R2 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	教授	深町 浩司	コロナ禍で移動や実験に制約がかかり、研究が進まなかったことはやむを得ず、来年度に持ち越し完遂する予定である。実技系授業ではオンラインや録画などまったく新しい発想が求められ負担が大きかったが、全ての授業を無事に完遂したことは高く評価できる。
管打楽器	准教授	橋本 岳人	今年度は、多くの演奏家がそうであるように、コロナウイルスの影響で依頼されていた多数の演奏会と、コンクールの審査員がキャンセルになり、研究活動に多くの支障が出た事は否めない。しかし、このコロナ禍での困難な状況であるにもかかわらず、生徒達がモチベーションを保ち続け、試演会を通じて実技は勿論、人間性の成長を実感出来た1年でもあった。オーケストラ授業では副部長として花崎部長をサポートし、スダーン先生の来日を実現させ、オーケストラ定期演奏会では学生皆全力を尽くし成功裡に終えることが出来た。今年度に引き続き、来年度開催される名フィル、愛知室内オケとの合同演奏会の窓口になっているので、学生の演奏力向上、演奏機会を増やすために尽力したいと思っている。
管打楽器	准教授	ブルックス 信雄 トーン	今年度はコロナウイルスの為多くのコンサート、講習会、コンクール中止になりました。だがその辛い中でも本学ではコロナ対策のガイドラインをきちんと守りながら対面レッスン、室内楽、アンサンブルの授業が出来ました。大変でしたが、色々勉強にもなりました。前向きで来年度の計画を立てています。
管打楽器	准教授	井上 圭	コロナ禍の中で新しい事に取り組めた反面、慣れない作業に膨大な時間がかかった。感染症対策にも時間を奪われ、研究活動に割ける時間が満足に取れなかった。しかし今までになかった発表の場が広がった事は有意義であったし、それらが今後につながる様に発展させていきたい。
教養	教授	水野 留規	コロナ禍によって授業運営に制約が生じたが、ZOOMを利用して履修者と直接に接するなどして、予定通りの範囲を教えることができた（試験や成果発表などは制約を受けた）。イタリア語資格試験もペルージャ大学との連携のもとで実施でき、高い目的意識をもって取り組んでいる学生数名を授業外で指導した。研究面ではルネサンス文学の重要な叙事詩「エルサレムの解放」の訳業を進め、作品全体をあと数年で訳し終えたい。紀要委員会では委員長として紀要の電子版発行に取り組み（紙媒体からの切り替え）、施設整備関係では長寿命化計画にも沿って深刻化している教室不足の解消策を模索した。海外協定校サレルノ大学への短期学生派遣は渡航制限により実現できなかったが、協定の更新に向けて事務方とも検討を重ねた。イタリアの美術系高等機関と進めている国際プロジェクトは来年度に向けて準備を進めている段階。
教養	教授	三宮 敦生	教育面では、特に前期の授業を遠隔で行ったため、準備不足も相俟って必ずしも満足のいく授業ができたわけではないが、今年度の貴重な経験を今後の糧としたい。研究面では、幼児健忘症の研究に目を通すなかで、記憶の発達への理解を深めることができ、教育心理学の授業にも役立てることができた。大学運営面では、コロナ禍でイレギュラーな対応を迫られることが多かったが、教職課程の業務を、スタッフ一同力を併せて全うすることができたのは幸いであった。それは芸術情報センターの業務にも言えることで、図書館のスタッフの皆さまのご尽力には心から感謝申し上げたい。社会貢献では毎年行っている科学教育講座が中止になったのは残念であるが、来年度またがんばりたい。
教養	准教授	井上 彩	研究：科研費による研究課題を延長することができ研究を続けた。昨年度2月に予定されていた国際学会は1年延期されてオンライン開催となり参加が可能となった。現在研究成果をまとめた論文を執筆中である。別の研究課題ではハワイ大学教授との共同研究を予定していたが渡米できず次年度に延期となった。教育：遠隔と対面両方の授業を経験して、それぞれのメリット・デメリットを実感した。大学運営：新型コロナウイルス感染対策とそれに付随するイレギュラーな事態への対応に追われる一年であった。
教養	准教授	大塚 直	令和2年度はコロナ禍のため、ヨーロッパへの渡航が制限され、予定していたホルヴァート研究ができなかった。またオンライン授業の準備で思いのほか時間を取られた。しかしホルヴァートの戯曲『ウィーンの森の物語』の翻訳を委嘱され、2021年3月に劇団「東京演劇アンサンブル」が東京芸術劇場で上演予定である。

R2 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
教養	准教授	中根 多恵	研究活動では、理論と実証の両方からの体系的アプローチをめざし、学会のパネルディスカッションや研究会での議論をととした理論的整理と、質問紙調査の実施をととしたデータ収集・分析を実施した。また並行して執筆に取り組んでいた学生向け入門テキストの出版によって、学術教育への貢献にも努めた。さらに教育活動では、履修生のニーズに沿いながら興味関心を引き出すための指導方法を追求し、授業展開の工夫に努めた。大学運営では、担当する委員会に出席し、学内外の状況把握に取り組んだ。
教養	准教授	三品 陽平	すべての項目に関して、新型コロナウイルスへの対応に振り回された1年であったが、おおむね、各目標を達成することができた。とりわけ、教職関連の教育活動において、学生に不利益のないよう対応できたことが一番の成果である。また、研究、教育、社会貢献においてウェブを介した実施方法を確立できた。